

弥生3月 最後の月となりました

今年度、最後の月となりました。それぞれの学年の1年間で間もなく終わります。先日まで行われた各学年の授業参観では、どの学年も成長した姿を御覧いただけたことと思います。御多用の中、足をお運びいただきありがとうございました。



明日からは、「1年のまとめ」の月として大事に過ごしてほしいと考えています。そして、子供たちの成長を認め、励まして、学年の修了や卒業を見つめたいと思います。修了や卒業はゴールではありません。新たな良きスタートとしてとらえ、一つの節目として人生の通過点を重ねて欲しいと思います。また、力強く次の節目を創れるように毎日毎日を懸命に生きて欲しいと願うばかりです。

そこで、全校集会（27日）では、校長講話の中で、最後のテーマを「極める」として伝えました。

今夏開催される「オリンピック・パラリンピック」にちなんで、「プロ」を目指そうということ話をしました。各学年の「プロ」として、この1年間のまとめをし、これまで教えてもらったことや、自分がやってきたことを1つでも多く「極めて」いくよう呼びかけました。ちなみに「プロ」というのは「〇〇ができる」とか「〇〇をする」ということも大切ですが、「自分やみんなのためにならないことをしない」ということも「プロ」として重要なことだと付け加えています。そして、「極める」ために、学校や家での過ごし方、学習の仕方、他の人との接し方も考えて実行してほしいという願いを伝えました。

今の学年として登校する日は、1～5年生14日、6年生12日です。その次の登校の日には、新しく1つ上の学年になっています。新しい学年のスタートを良いものにするために、残りは僅かしかありませんが、これから先の日々を「極めた生活」にして、「プロ」を目指すことができるようにサポートしていきます。



情けは人の為ならず

「情けは人の為（ため）ならず」…情をかけておけば、それがめぐりめぐってまた自分にもよい報いが来る。人に親切にしておけば必ずよい報いがある。

この言葉を聞くと、多くの人が、「情けをかけることは、結局はその人のためにならない（のすべきではない）」という意味だと思っているようです（文化庁の調べでは、およそ半数の人が誤って理解している。）。

このように、「情けは人の為（ため）ならず」ということわざは誤用されることも多いのですが、本来は下のような「恩送り」の概念を表しています。

ただ、もともとのこの言葉は次のようなものです。

「施せし情は人の為ならず」

おのがころの慰めと知れ

我れ人にかけし恵は忘れても

ひとの恩をば長く忘るな」

出典：『[新訳] 一日一言：「武士道」を貫いて生きるための366の格言集』 新渡戸稲造著

（情けは他人のためではなく自分自身のためにかけるものだ。だから自分が他人にした良いことは忘れてもいい。）

でも、人から良くしてもらったことは絶対に忘れてはいけない」という意味。

人間は「他人のため」に何かをすること自体を喜びとするものですし、「他人のため」に一生懸命努力している姿に感動するものです。「他者に親切なものには、より親切に振る舞う」という「正の連鎖」は良いのですが、「他者に親切にしないものには親切にしない、もしくは罰を与える」という「負の連鎖」や「倍返し」は断ち切らなければなりません。

「親切」とは、決して見返りを求めて行う行為ではないのですが、子供たちには「人にやさしくしたり、人に役立つことをしたりすると、それはきちんと自分に返ってくる」という意味を理解させつつ、他者を大事に思い、心を向けられる「利他の心」を根付かせたいものです。そうすれば、間違いなく他者からも大事にされ、幸せな人生を送ることができると信じています。